20250803　平和聖日・聖霊降臨節第９主日礼拝

司式：長原　光

奏楽：吉田千鶴子

前奏：「今、我が魂は主をほめたたえる」(D.ブクステフーデ)

招詞：主は多くの民の争いを裁き、はるか遠くまも、強い国々を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げずもはや戦うことを学ばない。(ミカ 4:3)

讃美歌：371「このこどもたちが」

平和聖日礼拝交読文

朗読聖書①詩編 62 篇

01 【指揮者によって。エドトンに合わせて。賛歌。ダビデの詩。】

02 わたしの魂は沈黙して、ただ神に向かう。神にわたしの救いはある。

03 神こそ、わたしの岩、わたしの救い、砦の塔。わたしは決して動揺しない。

04 お前たちはいつまで人に襲いかかるのか。亡きものにしようとして一団となり/人を倒れる壁、崩れる石垣とし

05 人が身を起こせば、押し倒そうと謀る。常に欺こうとして/口先で祝福し、腹の底で呪う。〔セラ

06 わたしの魂よ、沈黙して、ただ神に向かえ。神にのみ、わたしは希望をおいている。

07 神はわたしの岩、わたしの救い、砦の塔。わたしは動揺しない。

08 わたしの救いと栄えは神にかかっている。力と頼み、避けどころとする岩は神のもとにある。

09 民よ、どのような時にも神に信頼し/御前に心を注ぎ出せ。神はわたしたちの避けどころ。〔セラ

10 人の子らは空しいもの。人の子らは欺くもの。共に秤にかけても、息よりも軽い。

11 暴力に依存するな。搾取を空しく誇るな。力が力を生むことに心を奪われるな。

12 ひとつのことを神は語り/ふたつのことをわたしは聞いた/力は神のものであり

13 慈しみは、わたしの主よ、あなたのものである、と/ひとりひとりに、その業に従って/あなたは人間に報いをお与えになる、と。

朗読聖書②マタイによる福音書 7:24-29

◆家と土台

24 「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。

25 雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。

26 わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。

27 雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった。」

28 イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群衆はその教えに非常に驚いた。

29 彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。

祈祷

全能にして我らの救い主なる主イエス・キリストの父なる御神さま、今朝も私たちに呼掛け、平和聖日礼拝を献げ、聖餐に与る時をお与えくださり感謝申し上げます。

今日は敗戦後80年を経過し、特に戦争に至る道筋と、その中で為した私たちの役割に思いを馳せ、あなたの御言葉と御旨に従うことができなかった私たちの罪を見つめ直す時です。思えば、旧約の時代から、人間の営みは領土をはじめとする物の所有に対する欲望に取らわれたものでした。そして今もそれは変わりなく続いています。あなたの独り子が十字架に架かり私たちの罪を贖ってくださった後、2千年もそれは変わりません。過去は私たちの前を歩いています。どうか主よ、そのようなことの学びを通して、私たちが、あなたによる平和の使者として立つことが赦されますように、日々、私たちをお導きください。

主よ、あなたがこの世界を導き、平和を実現してくださいますように。特に、政（まつりごと）を司る指導者たちや、この世の指導的な立場にある者に、あなたの御心が示されますように祈ります。そして更に、今なお多くの戦禍の中にいる人々、特に子供たちの上にあなたのお守りがありますように祈ります。また、私たちがそのことを覚え、祈り、支援することができますように力をお与えください。

今朝、あなたは佃先生を立て、あなたの御言葉の説き明かしをする機会を与えてくださいました。どうか、先生を聖霊によって守り、充分にあなたの御国の消息を語ることができますように導いてください。聴く私たちの耳を開かせて、あなたの御言葉によって生きる者とさせてください。

今日の午後には平和聖日集会が予定されております。その学びの時をもあなたが祝福してくださいますように。

本日、様々な事情で礼拝を守れない兄弟姉妹を覚えます。あなたが夫々の場において、等しくお守りの内に置いてください。暑い夏が続きます。兄弟姉妹の健康を守り信仰を支えてくださいますように。

これらの感謝と祈りとを、主イエス・キリストの聖名よって御前にお献げ致します。アーメン。

讃美歌：449「千歳の岩よ」

説教　「神こそ、わたしの救い」　　佃　雅之

今朝は平和聖日礼拝です。戦争によって失われた多くの命と心に想いを寄せながら、私たちが信じる“神の平和とは何か”を問い直す日でもあります。この礼拝を通して、主イエス・キリストとアジアの隣人に謝罪し、再び、同じ罪を繰り返すことがないように、悔い改めの心を確かなものとしなければなりません。

日本では、今月80回目の終戦記念日を迎えます。私たちの教会でも、戦争の記憶を語り継いでくださる方が、年々少なくなってきています。けれども世界を見渡せば、今なお、至る所、武力による対立が続いています。だからこそ私たち一人ひとりが、“平和を作り出す者”として、どのように日々を歩むのか問われているのです。主の平和を実現するために、今の私たちに、主がどのような役割を与えておられるのか、この問いに応える手掛りが、今日、私たちに与えられた聖書の御言葉の中に示されています。神の御前に鎮まり、信仰の土台に立ち返る時として、心を整え、主の御声に耳を傾けたいと思います。

福音書から与えられました御言葉は、2024年6月から一年以上かけて共に学んできました『山上の説教』の締め括りの場面です。主キキリストは、「これらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている」と、弟子たちに語りかけられます。「これらの言葉」というのは、『マタイによる福音書』5章から始まり、この7章までに語られた『山上の説教』の全てを指していると言っていいと思います。『山上の説教』のはじめに、キリストは、「心貧しい者

は幸いである」、「悲しむ人々は、幸いである」(5:3-4)と語られまし。さらに、「腹を立ててはならない」(5:21-26)、「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬も向けなさい」(5:39)。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(5:44)、「天に富を積みなさい」(6:20)など、多くのことを教えてくださいました。これらの言葉は、この世の知恵ではその意味を理解することはできません。信仰をもって、神の言葉として受け取らなければ、決して分かるものではないでしょう。私たちが陥ってしまう罪と絶望から、私たちを神の子として取り戻すために、私たちが愛と真実に生きることができるように、キリストは『山上の説教』を語られたのです。

では私たちが、「神の子」として生涯を生き貫くために、キリストの弟子として主に仕えるために最も必要なことは何でしょうか。見逃してはならないことは、キリストがここで、「これらの言葉を聞いて行う者は」と言われていることです。「聞いて行う」は、“一つの言葉”として読まなければなりません。“私たちの生活の只中にキリストの言葉が活かされていなければならない”ということです。「聞く」ことと「行う」ことが一つの事となった時、はじめて私たちは“御言葉に服従”したことになるからです。「家」とは私たちの人生全体を表しています。そして、「岩」とは“イエス・キリストの言葉”、つまり、“神の御言葉、キリストご自身”です。主が言われる「賢い」と言う言葉には、「思いが深い」、あるいは、「見るべきものをちゃんと見ている」という意味が含まれています。問題とされていることは、人の目には隠されている「土台」です。私たちに求められていることは、見えないことに真剣であるかどうかです。

人生の危機は突如として襲ってくるものです。『山上の説教』を「聞いて行い」、キリストを「土台」とした生活をすれば安全な暮らしができるかと言えば、そうではないようです。キリスト者も悪戦苦闘するのです。私たちの人生には、罵られ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられる時があるものです。“なぜこんなことが”と、思うような出来事が起こります。「雨が降り、川があふれ、風が吹く」という言葉は、人生の中に突然訪れる試練や混乱、例えば、病、喪失、人間関係の崩れ、経済的困窮、社会の不安を象徴しているとも言えると思います。しかし、私たちにとって最大の危機は、“彼の日、その日、終わりの日”、つまり突如として下される“最後の審判の時”です。人間の本当の姿、教会の本当の姿は平穏な時には覆い隠されているものです。試練の時に、危機の時に、本当の姿が暴露されます。しかしキリストは嵐の中にあっても“御言葉を土台として生きる者は倒れない”のだと教えておられます。これは苦しみがなくなるという約束ではありません。「倒れない」というのは“神が私たちの魂を支え、生きる力を与えてくださる”と言う約束です。

キリストの「言葉を聞くだけで行わない者」はどうなるのでしょうか。その家は倒れてしまいます。しかも「その倒れ方はひどかった」と言われています。「土台」がしっかりした「家」だけが嵐に耐えることができる。“御言葉を土台にした生活だけが試練に耐え、終わりの日に祝福を受けることができる”ということです。「砂の上に建てられた家」は、見た目は立派でも、どんなに「賢く」見えても、嵐には耐えられません。私たちは今、終わりの見えない戦争、社会の混乱、自分自身の中の不安や焦りに囲まれながら生きています。そのような嵐の中にあっても主の言葉を聞き、御言葉に従って歩んでいきたいのです。

今日、もう一つ与えられている聖書箇所は、詩編62篇です。この詩は“嘆きの歌”のように聞こえますが、その中には、静かでありながら、確かな信仰が息づいています。詩人は「神のみが私の岩」であり、「神にこそ私の救いがある」と言います。この時、詩人は、決して平穏な状況にいたのではありません。思うようにいかない悩みの中で、この世の大きな力に揺り動かされそうになっています。そのような時にあって詩人は、神が共にいて下さることに信頼して生ける神に希望を見ています。人間というものは言葉とは裏腹に平然と仲間を犠牲にすることがあります。立っている人を押し倒そうとする、あるいは、口先で祝福し腹の底で呪うのが人間です。詩人は敵対する者たちの攻撃の中で、苦しみ嘆きつつも、静かに神を待ち望み、最後に二つのことを表明します。一つは、“神が信頼する者に対して豊かな慈しみをもって応えてくださる”ということ、そしてもう一つは、“自らの力を頼みとして人を陥れようとする者、欺き、呪う者たちには、厳しい裁きをもって報いられる”、と言うことです。神から離れている者は、たとえ、地位が高く人々から立派に見えたとしても、むなしく偽りの存在であるからです。

2節と6節に、「沈黙」という言葉が繰り返されています。“どのような時も不安に駆られたり、心を高ぶらせることなく、神からの救いを静かに待ち臨む姿勢”を意味する言葉です。この世の不条理な出来事にも、人間の行う悪意にも、慌てず、恐れず、神にのみ信頼を寄せることができたときに、神の救いの力が働くからです。誰に相談することもできず、信頼すべき人間もいない孤独の中で詩人は沈黙し、神に向かいます。神の御声は静かに囁く声ですから、私たちが沈黙していなければ、その声を聞くことはできません。沈黙は、ただ無言でいるということではありません。“自分の力で状況を変えようとすることを止め、神に全てを委ねて救いの時を静かに待つ”ということです。詩人の敵は、彼に襲い掛かり倒そうと企てますが、彼は確信をもって神の救いを待ち望むのです。詩人は私たちに、いかなる場合にも“神を信頼し心の悩みを神にのみ注ぎ出せ”と命じています。「心を注ぎ出せ」ということは、“自分のありのままの気持ちを神に告白する”ことです。私たちも、時に、人に裏切られたり、世の中の理不尽さに心を痛めることがあります。希望が砕かれ、無力感に襲われることもあります。けれども、そのような時にこそ、「沈黙して」、ただ神に向かうのです。

詩人は、「神こそ」が「砦」であり、「岩」であり、「救い」であると、何度も繰り返します。“神が唯一、私たちを最終的に守り、支え、救ってくださるお方である”、この信仰こそが平和の「土台」なのです。キリストは言われました。「わたしの言葉を聞いて、それを行う人は、岩の上に家を建てた人」のようだ。そして詩編詩人は告げます、「神こそ、わたしの救い」と。この二つの言葉が共に語っていることは、“どのような時代にあっても、神の言葉を土台に生きるものは倒れることがない”という約束です。

先週、教会の外の或る人から、戦時下の教会の様子を聞きたい、という申し出を受けました。当時の月報を見ると、戦勝ムードに沸く中、戦時体制の強化が進む1942年、或る長老が、このように語られていました。

> この現実に生きつつ、その中に御神がなる。御心が成就せんがために、祈り貫かねばなりません。この祈り貫くということは、これが伝道という形をとって実践に移行されるのであります。この御言葉は、この現実の世界全体に遍く宣べ伝えられなければなりません。“義人なし、一人だになし”であります。ここに伝道が、目下世界戦争の下において、最も大切な所以があると思うのであります。神の御言葉を聴かねば、個人はもとより国家も滅び、これが私どもの信念であります。

伝道こそが、この世に平和を実現することであるとの強い主張です。御言葉に「聞いて行う」こと、主の平和を実現する最も確かな道だと確信されています。日本の教会は小さな群れかもしれません。声を上げても、この世

の力に掻き消されることの方が多いでしょう。けれども、**“神こそ私の救い”**という信仰を持って歩むとき、そこに真の平和の土台が確かに築かれます。

『山上の説教』は、「**イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群衆はその教えに非常に驚いた。彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。**」と結ばれています。「**権威ある**」ということは、聞いた人自身が、その言葉に心動かされて、自ら進んで**“従いたい”**と思うようになる力のことです。**“聞いて、喜んで、この人のように生きたい”**と思わせる力が本来の「**権威**」です。

キリストはナザレの大工で、律法学者たちのように学問を受けたわけでも、特別な資格を持っていたわけでもありません。この世的な意味での「**権威**」と呼べるような肩書や地位は何もありませんでした。それにも拘らず、今日の箇所に続く8章1節に、「**イエスが山を下りられると、大勢の群衆が従った**」と書かれています。この人の言葉には聞いた人たちのこれまでの生き方を変える力があったのです。私たちが愛と真実に生きようと願い思う事ができるのは、キリストの権威により頼んで、悔い改めて、へりくだって、生きようとするときであります。

神と人間の関係は人格的なものです。神の選びと召しに対して、「**聞いて行う**」という人間の側の応答が求められていいます。嵐が来ることは人生において避けられない現実です。だからこそ、私たちは日々の歩みを「**岩の上に**」立てるように、確かな「**土台**」の上に築いていかなければなりません。

平和のために私たちが為すべきことは、真実に耳を傾けること、怒りに油を注ぐのではなく赦しと理解を学ぶこと、神の正義を求めて祈り続けること、福音を宣べ伝えること、日々の生活においてキリストの言葉を「**聞いて行う**」ことです。

主が私たちに求められていることは、「**岩の上に家を建てる**」生き方です。平和はどこか遠くで誰かが作るものではありません。私たち一人ひとりが、日々の生活の中で平和を選び取り築いていくものであります。私たちは主の御言葉を「**聞いて行う**」者へと変えられ、この世界にあって**“平和を実現する幸いな者”**でありたいと切に願いながら、主に従って歩んで参りましょう。お祈り致します。

平和の主、私たちの救いの神。あなたこそ、私たちの岩、私たちの救い、私たちの砦です。どのような時にも、あなたに信頼し、心を注ぎ出す者とならせてください。この世界に不安と分断が満ちている今、私たちが、あなたの御言葉を土台として生きることができますように。この世界を、キリストの権威によって平和へと導いてください。

主よ、この教会を岩の上に建てられた家としてください。この教会が嵐に遭っても倒れることなく、あなたの光と希望をこの世に放つ場所となりますように聖霊が導いてください。

主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:579「主を仰ぎ見れば」

聖晩餐　使徒信条の告白　和解の挨拶

讃美歌:79「みまえにわれらつどい」

献金・感謝(野呂智子)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

全能の父なる御神さま、あなたの大いなる聖名を賛美致します。猛暑の中ではありますが、本日の平和聖日礼拝を主にある兄弟姉妹と共に賛美、礼拝できましたことを心より感謝申し上げます。

敬愛する佃牧師より御言葉の説き明かしを頂き、また聖晩餐の恵みに与ることが赦されましたことも重ねて感謝申し上げます。

戦後80年を迎える節目の8月、この混沌とした世にあって、神さまの平和が実現しますようにと心から祈ります。私たちをあなたの平和を創り出す者としてお用い下さい。

あなたから戴いている恵みを感謝致します。今その一部を感謝と献身の徴としてお献げ致しました。どうぞあなたの御用のためにお使いください。

イエスさまが教えてくださった「**主の祈り**」を祈り、新たな週を歩ませてください。「**主の祈り**」…**アーメン。**

派遣:讃美歌92「主よ、わたしたちの主よ」

派遣と祝福〈司式:主は言われます。「私は誰を遣わすべきか。　会衆:私がここにおります。私を、お遣わし下さい。司式:「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす」と主は言われる。キリストの平和の使者として行きなさい。〉

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告:(1)会員消息:7/30(水).斎藤和子姉逝去、98年の地上でのご生涯でした。(2)大谷牧師休暇明け挨拶。

後奏:「我らに平安を与え給え」(F.クープラン)